

2012 年度研究助成 研究成果報告書（HP掲載用）

幼児期に行われる食育の効果の検証

—保育園・幼稚園における食育が、その後の食意識や食行動にどのような影響を与えるか—

福岡女子大学大学院 栄養健康科学専攻 西島千夏

【研究要旨】

保育園や幼稚園における食育体験が、子どもたちの食意識や食行動にどのような影響を及ぼしているのか明らかにすることを目的に、小学生が体験した食育関連情報を収集し、就学前の食育と子どもや保護者の食意識や食行動との関わりを分析した。就学前の食育の効果として、『食への関心の高まり』、『食べる意欲の向上』、『連携・協力体制の充実』等、7つのカテゴリがあげられた。保育園や幼稚園における食育が、その後の子ども・保護者・地域・職員の食意識を高め、食行動の関係性に好循環を生み出していることが示唆された。

【研究目的】

2011年9月、福岡県F市J小学校の全児童と保護者を対象に、食と健康に関する自記式質問紙調査を実施した。食に関する手伝いの頻度や内容（特に高度な技術を必要とする包丁・コンロを扱う等）において、低学年と高学年間の差がほとんどみられなかった。そこで低学年と高学年において、就学前（保育園・幼稚園）の食育体験に差があったのではないかと考えた。本研究では、保育園や幼稚園における食育が、その後の子どもや保護者の食意識や食行動にどのような影響を与えるか分析した。

【研究方法】

対象施設は、福岡県F市J小学校児童の出身園とし、同意を得られた保育園（1園）・幼稚園（2園）に質的・量的調査を実施した。園長または食育担当者を対象に過去6年間の食育の取り組み状況、他属性等について30分間の半構造化面接を行い、このとき量的データとして食育関連情報を収集した。分析方法は、量的調査結果をもとに、逐語録から食育に関連のある部分を抽出し、コード化したデータについて質的な内容分析を行った。類似する内容をまとめてサブカテゴリ、カテゴリへと分類した。データの示す意味を研究者間で検討、協議し、カテゴリ化の精度を高めた。

【研究結果】

面接対象者は食育を主に担当している副園長2名、主任保育士1名、調理師1名であった。平均年齢は 51.6 ± 12.4 歳、専門職としての平均通算勤務年数は 24.0 ± 14.1 年、施設での平均勤務年数は 19.0 ± 13.5 年であった。質的・量的調査結果から、いずれの園においても、過去6年間の食育に変化はみられなかった。しかし、食育により、『食への関心の高まり』、『食べる意欲の向上』、『食意識の向上』、『苦手野菜の克服』、『作業効率の向上』、『家庭での料理頻度数の増加』、『連携・協力体制の充実』があげられた。特に、実践的な食育体験（農業体験・料理体験等）により、子どもの食意識や食行動が向上するだけでなく、保護者や地域と職員が関わるきっかけをつくっており、保護者や地域住民の活動参加や、連携・協力体制の充実に寄与していた。さらに、子どもへの食育を通して、職員の食意識や食知識、食行動が高まっていた。

【考察】

対象園における6年間の食育には大きな変化がみられなかったことから、低学年と高学年の違いには、子ども・保護者・地域・職員の食意識の高まりと食行動の関係性が影響していることが示唆された。

【結論】

保育園や幼稚園における食育が、その後の子ども・保護者・地域・職員の食意識を高め、食行動の関係性に好循環を生み出していることが示唆された。